海外インターンシップの有効性についての事例研究

森下　美和[1)]　河合理英子[2)]

1．はじめに

文部科学省は，国際社会で活躍できる我が国の人材育成とともに，海外の優秀な人材を受け入れ，双方向の人的交流を活発にしていくことが我が国の将来を左右する最重要課題だとしている（文部科学省，2011）。大学教育においては，高度な知識に依拠しながら自主的に考え，創造的に行動できる人材の育成が求められており，生きた学問，現実をよりよく変革していく力としての学問を身につけることに向き合う教育が模索されている（和栗・河野，2004）。

こうした社会の動きを背景に，「経験学習」としての海外インターンシップが，キャリア教育に取り入れられている。日本におけるインターンシップの定義は，学生等が在学中に自らの専攻，将来のキャリアに関連した就業体験を行うことである（文部科学省，2014）。中学校では「職場体験」，高等学校では「インターンシップ」と呼ばれ，大学では「インターンシップ」と教員養成系の「教育実習」や保健・医療系の「臨地実習」を区別している（高良，2007）。本調査における「海外インターンシップ」は，日本の大学教育における「インターンシップ」であり，オーストラリアにおける「職場体験による学習」として取り入れたものである。

オーストラリアの中でも，特に日本語教育に熱心なメルボルンの現地の小・中・高等学校では，日本からの大学生を短期で受け入れ，「日本語」の授業の中で，自己紹介や日本文化について話す機会を与えてくれる（森下・河合，2014）。英単語や文法を覚えても，実際に使う機会の少ない EFL (English as a Foreign Language) 環境におかれている日本人にとっては，格好の実践練習の場となっている。本稿では，JTB を通じてオーストラリアの現地法人 DOA が運営している海外インターンシッププログラムについて，A 女子大学の事例を紹介し，主に英語力に関するアンケート調査にもとづく学生の意識における変化の観点から，その有効性を調べた。

[1)] 神戸学院大学経営学部　[2)] DOA JAPAN

2. 海外インターンシッププログラムの概要

2-1　参加者

A 女子大学の海外インターンシッププログラムは，2014 年 9 月 1 日から 22 日までの 22 日間，オーストラリアのメルボルンにおいて行われた。2 年次生 3 名，3 年次生 3 名，4 年次生 1 名の計 7 名が参加し，そのうち 6 名はグローバルコミュニケーション学科，1 名は初等教育学科の学生（表 2 の学生 A）であった。Oxford Quick Placement Test (Oxford University Press, 2004) の平均スコアは 28.6 点（60 点満点）で，CEFR (Common European Framework of Reference for Languages; Council of Europe, 2001) の A2 (Elementary) レベルであった。

2-2　インターンシップ先の決定

インターンシップ先は，現地の小・中・高等学校における「日本語」の授業を職場とする「スクールコース」と，ホテル，ショップ，現地の日系企業などを職場とする「ビジネスコース」の 2 つから選択することができる。参加の動機，将来就きたい職業，キャリアプランなどを参考に，各学生のインターンシップ先が決定された（表 2）。

2-3　渡航前研修

2014 年 7 月に，日本在住の DOA トレーナーが，海外インターンシップに関する事前研修を 2 回行った。英語での自己紹介やプレゼンテーションの練習に加え，現地での行動に関する注意事項を細かく説明した。インターンシップを成功させるためには，事前研修でしっかりと準備を行うことが必須であるため，研修の様子はビデオに撮影し，当日出席できなかった学生には，後日必ず見るように指導した。

2-4　現地研修

現地研修の行程および目的を，表１に示す。

表１．現地研修の行程および目的

日程		行程	目的
1日目	9月1日（月）	日本発	
2日目	9月2日（火）	メルボルン着 オリエンテーション・ガイダンス （ホテル宿泊）	 オフィスと駅の場所の把握
3日目	9月3日（水）	英語の事前テスト デスク研修「異文化理解」 シティウォークラリー ホームステイの心構え （ホームステイ先へ移動）	 異文化認識の理解を深める チームワークを作る町歩き 注意事項の確認
4日目	9月4日（木）	デスク研修「コミュニケーション」 「リーダーシップ」 電話・ルート確認	伝えることを考える チームに貢献する意識を知る 英語で電話をかける練習
5日目	9月5日（金）	英語模擬面接 研修の心構え ルート下見・挨拶	初対面での会話練習 立場と役割を把握する 通勤ルートの確認
6～ 7日目	9月6日（土） 9月7日（日）	自主研修	ふりかえりと情報交換
8～ 12日目	9月8日（月） ～12日（金）	インターンシップ	
13～ 14日目	9月13日（土） 9月14日（日）	自主研修	ふりかえりと情報交換
15～ 19日目	9月15日（月） ～19日（金）	インターンシップ	
20日目	9月20日（土）	修了式・英語の事後テスト	ふりかえりと発表
21日目	9月21日（日）	帰国に向けて出発	
22日目	9月22日（月）	帰国	

日本を出発した翌日の朝にメルボルンに到着し，DOA オフィスの会議室にてオリエンテーションを行った。現地の DOA トレーナーが，今後のスケジュールなどの説明をした後，市内の地理を把握するために全員で外出した。翌日から，遅刻したり道に迷うことなく各自でオフィスに集合できるように，公共交通機関のチケットを買ったり，トラム（路面電車）の乗り方を確認した。

３日目の午前中は，英語の事前テストを実施した後，デスク研修と呼ばれる座学で異文化理解について学んだ。午後は,「シティウォークラリー」というチーム制町歩きを行った。学生２人または３人のグループ毎にいくつかの課題が与えられ, 町中で誰かにインタビューしたり写真を撮ったりしながら, 制限時間内に戻ってくるというものである。その後, ホームステイの心構えについての最終確認をして，各ホストファミリーの迎えを待った。

４日目は，各自，ホームステイ先から，公共交通機関を使って DOA オフィスまで来ることになっていた。全員が遅刻なく集合し，コミュニケーションとリーダーシップに関するデスク研修を行った。午後は，インターンシップ先へ挨拶に行くためのアポイントメントを取る目的で，電話をかける練習を行った。

５日目は，インターンシップ前の最後のデスク研修で，英語による模擬面接を行い，午後に会う担当者への挨拶で想定される会話の練習をした。学生たちは，日本から準備してきた自己紹介や想定問答集を活用し，少しフォーマルな英会話に取り組んだ。午後は，翌

週から通うルートを確認しながら，各自，担当者に挨拶をするために出かけた。

2-5　インターンシップ先での業務内容

参加の動機や将来就きたい職業にもとづくインターンシップ先での業務内容を，表 2 に示す。

表 2．参加の動機，将来就きたい職業，およびインターンシップ先での業務内容

学生	参加の動機	将来就きたい職業	職場	業務内容
A	外国の教育に興味がある	小学校教諭	小学校	授業補助，教材準備，日本文化紹介，学校行事手伝いなど
B	日本語教員の免許を目指しているので，海外で日本語を教えている人から学びたいことと英語力向上	英語を使える仕事		
C	英語力向上と教育をみてみたい	英語教師		
D	実践的な語学力向上と日本の文化との違いや積極性を身につけたい	英語教師	高校	授業補助，教材準備，試験監督，スピーキング練習，学校行事参加など
E	日本語が伝わらない環境で，生活・仕事することで英語の意志疎通や対応の仕方を身につけたい	グランドスタッフ	ホテル	接客，郵便対応，ファイリング，PC対応，経理補助，清掃など
F	海外で働くことに興味がある	海外またはグローバルな職場で働きたい	ショップ	接客，陳列，リサーチ，ファイリング，清掃など
G	外国の人と良いコミュニケーションをとり，実際の英語圏の環境を体験したい	英語を使う仕事	大学事務	接客，受付，電話対応，ファイリング，PC対応など

「スクールコース」を選択した学生 A ～ C は，小学校のプレップクラス（1 年生より 1 つ下の学年）から 6 年生のクラスの「日本語」の授業で，オーストラリア人教師のアシスタントとして，主に漢字やカタカナを教えた。学生 D は，私立の中高一貫校の男子校における 9 年生から 12 年生の授業で，オーストラリア人教師と日本人教師の両方のクラスを経験した。特に 12 年生には，スピーキングの個別指導をしたり，テキストを使って文法やリスニングを教えた。

「ビジネスコース」を選択した学生 E は，ホテルでのレセプション，ファイリングなどの事務処理，インボイス入力，経理資料入力のほか，ハウスキーピング，ミニバーチェックも担当した。学生 F は，大型のリサイクルショップで，商品の陳列，バックオフィスでのタグ付け作業などを行った。学生 G は，大学の事務を経験した。英語研修施設の受付業務を担当し，様々な国からの留学生の窓口となった。ファイリングやコンピュータを使った入力作業が主であったが，スタッフミーテイングにも参加した。

2-6　ふりかえり学習

和栗 (2010) によると，「ふりかえり (reflection)」は，価値観が多様化し，変化が激しい

社会の中で，他者とかかわりあいながら自主的に生き，学び続けるために必要な能力として昨今注目されている。また，松尾（2011）は，経験から学ぶための「ストレッチ，リフレクション，エンジョイメント」が必要であり，単に「経験学習サイクル」を回すだけでは十分ではないと主張する。

インターンシップ期間中の日々の「ふりかえり」には，KPT 分析（Keep：いいところ，Problem：悪いところ，Try：改善のためにやることのフレームワークでのふりかえり；天野, 2013）を用いるように指示した。毎日記録することが「ふりかえり」を促したのか，インターンシップ期間中（11 日目）や終了後（20 日目）における全体での「ふりかえり」でも，学生たちは，各自の業務や受け入れ先の様子などを活発に報告し合っていた。

3. 英語力に関する調査

研修の前後に，英語の 4 技能（リーディング，リスニング，スピーキング，ライティング）についての事前・事後テストを実施した。本稿では主に，事後テストの際に行った英語力に関するアンケート調査の結果について報告する。

英語の 4 技能が全体として研修前より伸びたと思うかどうかについて，1: 全くそうでない，2: あまりそうでない，3: どちらとも言えない，4: そうだ，5: かなりそうだ，という 5 件法で評価してもらったところ，平均スコアは，リーディング = 2.7，リスニング = 4.1，スピーキング = 4.0，ライティング = 3.1 という結果になった。語学研修の効果について調査した森下（2013）同様，4 技能の中では，音声言語であるリスニングとスピーキングの評価が高かった。

リスニング力が伸びたと思う理由（4 ～ 5 の評価の記述回答）は，以下の通りであった。

A　話している速さについていけるようになった。
B　英語を常に聞いていたので。
C　自分に話しかけられている時以外にも耳を傾けていた。
D　生活の中で英語を耳にすることがほとんどだった。
E　ホストや職場，テレビなどで聴き取れる言葉や文章が増えてきた。
F　従業員の人やお客さんの言っていることが最初より聴き取れるようになった。
G　職場でもホスト先でも英語力が上がっていると言われたから。

スピーキング力が伸びたと思う理由（4 ～ 5 の評価の記述回答）は，以下の通りであった。

A　たくさんの人と話をする中で，自分で話すことを簡潔にまとめて話すことができるようになった。コミュニケーションを楽しめた。
B　常に英語を話すので，力自体は上がったと思う。
E　英語に少しだけ慣れて来たと思う。
F　毎日英語で従業員の人やホストの人と話すことによって，思っていることを伝えられるようになった。何人かの人が英語すごいと言ってくれたから。
G　出来るだけ自分から話しかけて出来るだけ多く話したからです。また聞き返されることが少なくなったから。

スピーキングについては，リスニングに比べてやや個人差があり，スピーキング力があまり伸びなかったと思う理由としては，「周りに日本語が話せる人がいたために，日本語に頼りすぎていた」などのコメントがあった。また，もっとも伸びなかったと評価されたリーディングについては，「あまり読む機会がなかった」という答えが多く，日本にいるときとはまったく逆の経験をしていることが分かる。

最後に，インターンシップ期間中の日常生活（オリエンテーションを含まない）で，英語と日本語を使う割合はどのぐらいだったか，足して 10 になるように数字で示してもらったところ，平均すると，英語：日本語＝ 6.7：3.3 という結果になった。森下（2013）における語学研修に参加した学生は，同じ質問に対し，英語：日本語＝ 4.8：5.2 と回答している。彼らは，英語を L1（第 1 言語）とする環境に置かれていても，英語と日本語をほぼ同程度使用していると自覚しており，日本人同士で行動することが多かったか，あるいは，英語を使う際に上手くコミュニケーションが取れずにあきらめてしまった可能性がある。一方，本調査におけるインターンシップの参加者は，アンケート結果からも分かるように，職場の日々の業務をこなすために，自然に英語の使用頻度が増えたと考えられる。

4. まとめ

今回のような調査で，海外インターンシップの参加者のほうが語学研修の参加者よりも英語力が向上していることが認められれば，前者における経験学習の成果について，1）懸命に手を伸ばせば届きそうな目標をもち，2）実施した結果，どこが良く，どこが悪かったかについて情報を得ることができ，3）それを次の機会に生かすことができるような練習のやりかたをしている人は成長できる，とする松尾（2011）の主張を，英語学習において実践していると言えるのではないだろうか。この仮説を実証するためには，同時期に海外インターンシップと語学研修の各プログラムに参加した学生間で，英語力のテストやアンケート調査の結果を比較するなど，さらなる調査が必要である。

謝辞

本稿の執筆にあたり，調査とその後の情報提供にご協力くださった DOA の現地スタッフの方々，事前・事後テストならびにアンケートにご協力くださった A 女子大学の関係者とインターンシッププログラムに参加した学生の皆さんに，深くお礼申し上げます。

参考文献

［1］ 天野勝 (2013).『これだけ！ KPT あらゆるプロセスを成果につなげる最強のカイゼンフレームワーク』すばる舎リンケージ .

［2］ Council of Europe. (2001). *Common European framework of reference for languages: Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.

［3］ 国立教育政策研究所紀要 , 第 139 集 , 85-100.

［４］ 高良和武 (2007).『インターンシップとキャリア：産学連携教育の実証的研究』学文社 .

［５］ 松尾睦 (2011).『「経験学習」入門』ダイヤモンド社 .

［６］ 文部科学省 (2011).『国際交流政策懇談会最終報告書』
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/kokusai/009/toushin/1310853.htm

［７］ 文部科学省 (2014).『インターンシップの推進に当たっての基本的考え方』
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2014/04/18/1346604_01.pdf

［８］ 森下美和（2013）.「短期海外研修プログラムが日本人英語学習者の音声言語処理能力にもたらす効果」関西英語教育学会『英語教育研究』第 36 号 , 41-50.

［９］ 森下美和・河合理英子 (2014).「メルボルン・リポート：教育に焦点を当てて」第 95 回次世代大学教育研究会（神戸学院大学）
https://dl.dropboxusercontent.com/u/12166972/ne95-kobe-morishita-kawai-20140712.pdf

［10］ Oxford University Press. (2004). *Quick placement test*. Oxford: Oxford University Press.

［11］ 和栗百恵・河野光雄 (2004).『「Learning in Action, Learning for Action：経験を通した共感と協力が行動を生み出す学びのプログラム」教育モデルとしての「国際インターンシッププログラム」の意識と課題』中央大学教養番組「知の回廊」http://www.chuo-u.ac.jp/usr/kairou/programs/2004/2004_05/

［12］ 和栗百恵 (2010).『「ふりかえり」と学習：大学教育におけるふりかえり支援のために』